

# コーチング解体新書

～やる気を引き出す源泉を探る～

## その4 わたしとあなた から わたしたちへ



猪俣 恭子

中央大学文学部卒

卒業後足利銀行に7年間勤務。窓口業務を経て、人事部研修グループで行内研修の企画・運営および講師を担当。結婚を機に退職してからは、実家の印刷会社に従事する一方、パソコンスクール講師として教育活動を行う。2004年からはコーチングを用いた社内の人材育成を手掛け、「良質なコミュニケーションが実現されている現場こそがビジネスの成功をうむ」と実感し、2006年Coaching Press株式会社を設立、代表取締役として現在に至る。

財生涯学習開発財団認定マスターコーチ

研修準備のネタ探しをしていたとき、ばらばらめくっていた本からこんな言葉が目飛び込んできました。

「コミュニケーションとは、相手と自分の共通点を探すことです。」そもそもコミュニケーションという言葉の語源は、「共通のものを持つ」という意味のラテン語からきています。なるほどなるほど。だから「いやあ、若い人たちの考え方や価値観っていうのは、よくわからないよね。世代が違うところも上手いかわからないものかなあって、よく思うよ。」と気焔吐く経営者や管理職もさりありなん、というところなのか…。そういえば、この前は、30代後半のマネージャーが20代半ばの部下たちとの価値観のギャップについて、とうとうと語っていたな…。

そして話は今年の暑い暑い夏の日にさかのぼります。世間は夏休み真っ只中。埼玉県内のある高校で行われたコミュニケーションスキルトレーニングにコーチとして参加しました。4人1グループの隣の席は初対面の3年生の女子高生。小柄で細身で髪の毛はポニーテール、少々伏目がちな文芸少女という感じの子です。その彼女から、「この大人誰？ どんな人？ どれくらい安全な人？」と私に対しての品定めオーラがびしびしと伝わってきて、肘が触れ合う距離でありながら、なんとも居心地悪い思いで一杯になっていました。

そんなことにはもちろんお構いなく、早速トレーニングは一つめがスタート。テーマは「二つに一つ。あなたはどちらを選ぶ？」配布された資料を見ながら、お互い自分が選んだほうを声を出して読み上げてみれば、

私「犬」、彼女「猫」

私「都会」、彼女「田舎」

私「夏」、彼女「冬」

私「海」、彼女「山」

と、ことごとく違うものばかり。

お互いごまかしつつの笑顔ではいましたが、「この人と私って全然違うんだな。」しらっとした空気がそこはかとなく漂いはじめました。いよいよもって、居心地はさらに悪くなるばかり。それでもおかまいなしに移った二つ目のトレーニングの質問のやりとりの中で、彼女は読書が好きで図書館にいると落ち着くということを知りました。

ふん。本ねえ。どんな本が好きなのかな？ 知らない本や作家だったりして？ だったら、またしらせるな。えーい。だめもとで聞いてみよう！

「で、どんな本が好きなの？」ちょっと警戒気味の彼女。肩をすばめる様子から、どうせ言ったってわかんないでしょーってのが伝わってきます。「司馬遼太郎とか、池波正太郎…とかです。」(蚊のなくような小さな声。)

はあ～、渋いな。ということは歴史が好きなのかな。

「私も好きだよ。司馬遼太郎とか池波正太郎。いいよね。」

「え～。ほんと～？」おやっ。無理して私があわせていると思っているらしい。「ほんとだよ。『竜馬が行く』とか。池波正太郎はさ、『鬼平』とか『剣客商売』とか面白いよね。」

彼女「まだそれは読んでないなあ。」

私「ねえ、もしかして歴史好き？」

彼女「好きです。」(かなり遠慮がち。)

私「ほんと！ 私も好きだよ。」

彼女「ほんとですか～？」

上目遣いに視線を投げてくる。明らかに適当にあわせてると疑っている様子がダイレクトに伝わってきました。

私「ほんとだよ。だって私ね、大学は文学部史学科、それも国史学専攻だもん。だから、本は歴史モノが好き。テレビは大河ドラマ最高。」

これが効果できめんでした。「えー！！！！ほんと～！！！！私も史学科行きたいんです～！」えっ、そうだったんだ。それからは先ほどの「しらっ～」とした空気はどこふくかぜ、ぐいぐいぐいっつとこちらに近寄ってきて、彼女の目には星がとまり、声のトーンまで音符がとまるようになりました。

「どこの大学ですか～？ 私、将来は博物館や美術館の学芸員になりたいんです。」あっ、嬉しいなあ。こんな若い子が学芸員になりたいって夢もっている。いいな。いいな。

「ねえ、〇〇大学めざしてみれば？」「〇〇大学ですか。いいなって思うんですけど、ランクが高すぎて…」と2人の間に流れる空気が一気にホットになってきました。全く共通するものがないな～と思っていたときは、わたしとあなたの一対一の関係。

でも、お互い共有できるものがある、とわかりあえた瞬間に、わたしたち 仲間の関係になる。

あなたとわたし から わたしたち に。

お互いに共有できるものを探す。好きなものでも、夢でも、興味のあるものでも…、何でも…。そこには、世代を超えてわかりあえるものがきっとある、と確信しました。

コーチングの大前提はお互いが信頼関係にあること、これだけは何があっても外せません。

この「わたしたち」という感覚には、相手が自分に「この人だったら相談できる、この人だったら話を聞いてくれる。」と信頼を寄せることに一役かってくれるもの、としみじみと思いました。その後、彼女は推薦で大学が決まったとか。自分の大切な夢がそのままに肯定されたことにより、将来に対してより一層前向きになったのかもしれない。

「コミュニケーションとは、相手と自分の共通点を探すことです。」シンプルな言葉に、真実がつまっていることをあらためて実感しているこの頃です。



コーチングプレス株式会社

〒320-0817 宇都宮市本丸町2-20

電話 028-634-7640 FAX 028-636-7855

<http://www.coaching-press.com/>